同志社大学大学院
社会学研究科

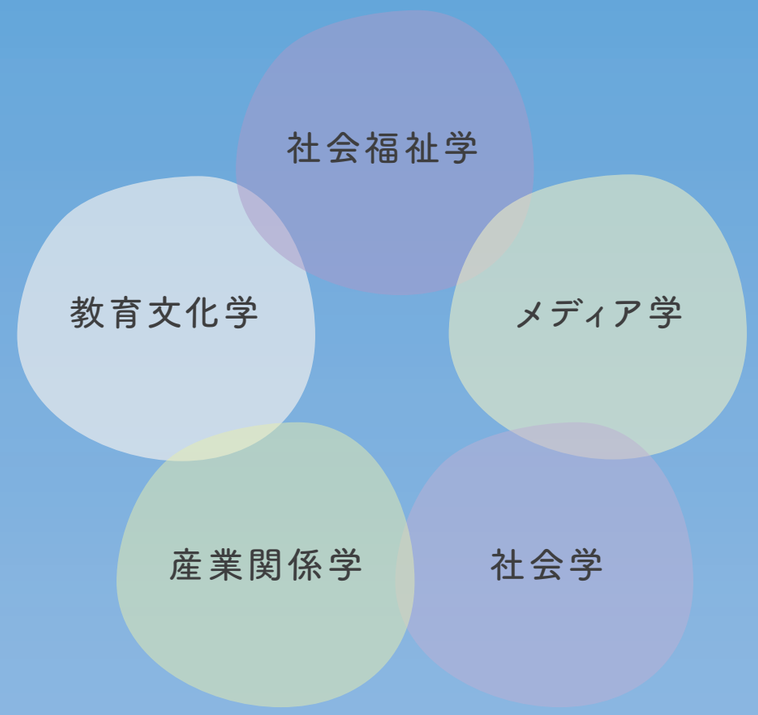
高度な専門性と国際感覚、豊かな人間性で
大きく変化する社会の課題・本質に迫り
新しい時代を開く人物になる

諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ 新島 襄

社会学研究科とは

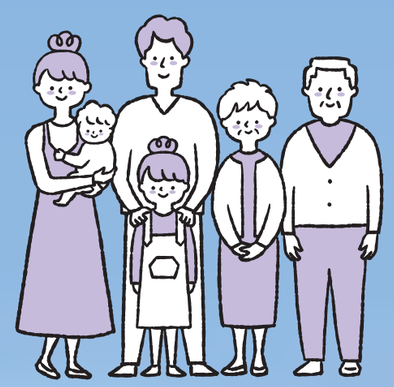
グローバリゼーションと情報化、地域対立やテロ、仕事の疎外と失業、
少子・高齢化と家族システムの揺らぎ、次世代の教育・人間形成のあり方の変化。
現代社会は今、大きな変化を迎えています。
この変化は人間のあり方にも根本的な影響を与えつつあります。
社会科学とは、これらの社会変動をトータルに解明し、
複雑な行動を体系的に再構築することで「人間のあり方」を究明する学問です。

現在、社会科学には新たな研究の道を切り開くことが求められています。
同志社大学大学院社会学研究科では
「社会福祉学」「メディア学」「教育文化学」「社会学」「産業関係学」の
５つの専攻を設置。各専攻の視点から現代社会の課題に向き合い
人間主義的な立場から整理し、解明できる人材の一大拠点を目指しています。



CONTENTS

P4.....社会学研究科とは
P6.....社会福祉学専攻
P10 .....メディア学専攻
P14 .....教育文化学専攻
P18 .....社会学専攻
P22 .....産業関係学専攻
P26 .....各制度一覧



高度な専門性を養成する５つの専攻

「社会福祉学」「メディア学」「教育文化学」「社会学」「産業関係学」の各専攻では
社会福祉の問題、社会の自己認識としてのマスメディア、
人間形成における文化と教育の課題、人間と社会の関係、
産業活動における人間関係について、高度な専門家・研究者を養成します。

社会福祉学専攻

Social Welfare

社会福祉学専攻では、社会福祉の「価値・倫理観」「知識」「援助技術」を習得します。博士課程（前期）では社会福祉学の理論、思想・歴史、援助論と制度・政策論についてバランスよく学び、社会福祉領域における高度な専門家レベルに達することが目標です。博士課程（後期）では博士学位論文の作成指導を通じて専門性を高め、優秀な研究者、ならびに社会福祉の諸領域において企画立案・実践ができる経営・管理的実践家を目指します。

研究室

木原 活信 教授 *Prof. Katsunobu Kihara*

研究テーマ　福祉哲学、福祉思想史（社会福祉の根源にある価値観、思想、宗教意識に関する研究）／キリスト教社会福祉学（ジョージ・ミュラーに関する研究）／ソーシャルワークにおけるナラティブ論、スピリチュアリティ、自殺予防

学生の主な論文テーマ　「自殺で遺された家族が求める支援：偏見による苦しみへの対応」／「知的障害者の「親元からの自立」を実現する実践―エピソード記述で描き出す新しい枠組み」／「賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響とは何か」

空閑 浩人 教授 *Prof. Hiroto Kuga*

研究テーマ　ソーシャルワーク及びソーシャルワーカー養成に関する研究

学生の主な論文テーマ　地域における子どもの居場所づくりに関する研究／入居型施設における認知症高齢者へのケアに関する研究／スクールソーシャルワークの今日的意義と展開に関する研究

野村 裕美 教授 *Prof. Yumi Nomura*

研究テーマ　保健医療分野におけるソーシャルワーク、フィールドワーク、事例教育法

鈴木 良 教授 *Prof. Ryo Suzuki*

研究テーマ　障害学と障害福祉研究／障害者の脱施設化や地域生活支援についての日本と海外の比較研究

小山 隆 教授 *Prof. Takashi Koyama*

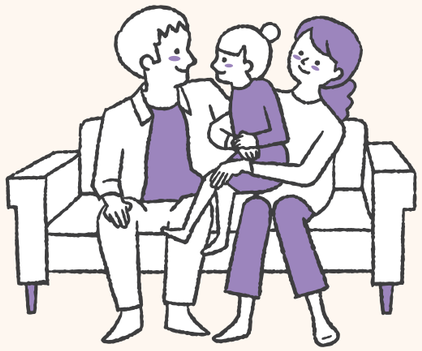
研究テーマ　ソーシャルワーク研究

学生の主な論文テーマ　高齢者ショートステイにおけるレジデンシャル・ソーシャルワーク／ソーシャルワークの焦点と状況概念

永田 祐 教授 *Prof. Yu Nagata*

研究テーマ　包括的な支援体制のガバナンス／権利擁護支援の体制整備

学生の主な論文テーマ　地域包括ケアシステムにおける医療と介護の連携／制度の狭間と包括的な支援体制



主な就職先

関西学院大学／日本女子大学／関西大学／岡山県立大学／天理大学／京都市児童相談所／京都市スクール・ソーシャルワーカー

大学院で学べること

博士課程（前期）

少子高齢社会が抱える福祉課題の理解を深め、解決に寄与できる人材へ

少子高齢化社会を迎え、多くの福祉課題が発生しています。博士課程（前期）の目的は、その解決に向けた社会福祉の制度・政策、地域福祉、対人援助それぞれの基礎知識や相談援助スキルを身につけることです。そして国際的な視点と社会科学的知見から、さまざまな社会問題について探求し、その解決に向けての行動・発信ができるレベルまで自己を高めます。最終的には、社会福祉の基礎にある価値観や倫理観を習得し、福祉社会の健全な発展に寄与できるような人材を目指します。

バランスのとれた知見・スキルをベースに高度な専門性を身につける

博士課程（前期）のカリキュラムは、大きく5つの群に分けられます。「A群：基礎科目および科学的調査方法論の習得を目標とする科目」「B群：社会福祉の思想・歴史」「C群：社会福祉のマクロ、メゾおよび国際社会福祉」「D群：社会福祉のミクロ」「E群：社会福祉の分野及び関連領域」です。これらの5群のカリキュラムを取ることで、専門分野を持ちながらも、それだけに偏らないよう、バランスの良い知見とスキルを身につけます。そして、深めた自分の研究成果を修士論文にまとめ発表することを目指します。

博士課程（後期）

政策企画・提案ができるレベルの能力を目指す

博士課程（後期）は、前期で身につけた知識・スキルをより高度なものに発展させる場です。基本的な知識を高度な専門知識へ、相談援助スキルをより現場に密着したものへと高めつつ、より広い国際的な視野を身につけます。さらに社会福祉というテーマに対する探求、行動、発信のすべての分野において、より高いレベルを目指します。最終的には、福祉社会の健全な発展のために、多様な視点や価値観から考え、ハイレベルな政策の企画や提案、実践ができるような研究職等にふさわしい人材を目指すことが目標です。

活発な議論により知見を深め、博士論文を作成する

博士課程（後期）のカリキュラムは、研究指導科目と授業科目に分けられます。研究指導科目では、指導教員の指導のもと博士論文を完成させます。授業科目には「セミナー」「社会福祉学総合演習」などが含まれ、活発な議論を通じ知見を深めます。研究内容は学会報告や学術論文で定期的に発表するほか、課程の最後には博士論文としてまとめ、発表します。博士論文の作成においては、博士論文予備発表会、博士学位論文提出予備審査を受け、指導教員および副指導教員、そのほかの教員からも指導を受けます。

私の研究計画

「親」「きょうだい」の区別のない包括的な「家族」支援を考える

社会福祉学専攻 博士課程（後期）
藤野 真凜

知的障害者について、本人とその家族に焦点を当てて研究しています。本人はもちろん、親やきょうだいという家族に対してどのような支援ができるのかを特に考えています。

知的障害を持つ人は、現在の日本では社会参加がしにくい、つまり自立して生きていきにくい状況に置かれがちです。障害者の面倒はその家族が見るべきであるという考え方も根強く残っていて、成人後もほぼずっと家族と同居せざるを得ない人がほとんどです。このような状況から、障害者の親支援に関する研究は今までもされてきました。さらに最近は、当事者のきょうだいに対する支援や研究もされるようになってきました。しかし私は、知的障害者を支える負担感は「親」「きょうだい」と分けられるものではなく、家族全体に共通してあるものではないかと考えています。そうであれば「家族」全体に対し、より包括的な支援がされるべきではないのか。そう考えて、研究に取り組んでいます。

今まで、障害を持つ子どもが通うデイサービスや、障害を持つ人の就業を支援する事業所等でアルバイトをし、現場を見ていろいろ学んできました。また、私自身も知的障害者のきょうだいです。こういった経験を元に研究を深め、将来は、ソーシャルワーカーの卵である学生たちに対し、知的障害者当事者だけでなく家族にも視野を広げて考えるよう伝えられる教育者になりたいと考えています。

教員 + 現役 + 修了生座談会

社会福祉学専攻

博士課程（後期）在籍
藤野 真凜

博士課程（後期）在籍
早川 紗耶香

木原 活信
教授

博士課程（前期）在籍
髙坂 遥菜

多様な人々が、福祉に対する熱い思いを抱えて集まる場所

木原：社会福祉学専攻はとても多様な人が集まっていると思います。年齢も、髙坂さんや藤野さんのように学部から直接院に上がってきた人もいれば、早川さんのように一度社会に出て、院に戻ってきた人もいる。

早川：私のように、もともと看護師をしていて、そこから学部に編入、院に上がって、博士課程（前期）を修了してまた社会に出て行政で働き、再び院に戻ったという、社会人と院を行ったり来たりという人もいます。

木原：そういう人も多いですね。中には定年を迎えてから、やっと勉強に専念できる時間ができたと院に入る人もいる。福祉の現場でソーシャルワーカーとして働きながら学んでいる人もいる。ほかの大学や施設、国際機関で働いている人が、月数回ゼミに参加するというケースもある。

藤野：中には、私が普通に就職していたら上司と部下としてしか出会えなかっただろうと思う人もいて……そういう人と、同じゼミ生として対等に話や議論ができるのはすごい経験だな、と思います。

髙坂：実践をした上で研究をしている人ばかりで、そんな中で発表するのは緊張します。だけど、私が言いたいことをすごく汲み取っていただいて、いろんな視点からコメントしてもらえる。なかなか言葉にできなかったことが、もらったコメントをきっかけにまとまっていくこともあります。

早川：基本的に熱い方が多いので、発表を聞いているうちに「あ、ちょっとこの分野も勉強してみようかな」と思うことも多いですね。結果、自分の成長にもつながっているといつも思います。

木原：最近はオンラインでも授業に参加できるようになりましたから、海外や職場から参加する人もいますしね。みなさん専門分野にはこだわりがあるし、語りだしたら止まらない人も多い。今日集まってくれたみなさんも研究テーマにはこだわりを持っていますしね。

髙坂：そうですね。私は学部のときからひきこもりをテーマに学んでいたのですが、新型コロナウイルス感染症の流行で、十分に当事者から直接話を伺えなかったんです。手記などの文献で卒論を書くしかない状況だったので、きちんと当事者から直接話を聞いて理解をしたいと思ったことが、院に進んだ理由です。

藤野：私は、学部時代は知的障害者について研究していました。だけど、就職活動や卒業論文に取り組む中で、自分が学んだことをうまく言語化できないことや、知的障害者当事者だけでなくその家族に対する支援の問題もやりたいと思い、院に進みました。

早川：私が院に入った理由のひとつは、学部の学びだけでは物足りなかったこと。あと、博士課程（前期）修了後にしていたケースワーカーの仕事で、大学院で学んだことと現実とのギャップを感じたことも理由のひとつです。自分の実践を言葉にしたい、現実の問題をどう解決していけばいいかを研究して還元したい気持ちがあって、博士課程（後期）に戻ってきました。

木原：自分の興味があることを十分に研究して言語化したい気持ちは、きっとみなさん共通して持っているのではないかと思います。フィールドワークや仕事として現場を経験しても、そこでの経験が言語化できるとは限らない。ゼミに持ち帰って研究することで、ある程度は言語化できるのですが、やはり簡単にはできない。結果、「言葉にできそうだな」「やっぱり難しいな」を繰り返して、こう……学びの深みにはまっていく（一同笑）

研究テーマにこだわり、「自分」を貫き研究すること

髙坂：大学院に入って思ったのですが、自分でテーマを決めて、自分でスケジュールを立てて研究していくことは、結構孤独だな、と。学部のときは、大学に行けば自分の気持ちなどを気軽に話せる友だちがいたけど、院に入ると同世代の友人がほぼいなくなるので、そういうことができないので……

藤野：博士課程（後期）に入ると、さらに研究ペースも人それぞれ、バラバラになります。修士論文を書くのはだいたいみんな同じくらいのペース、2〜3年で書くけど、博士論文は書くペースも本当にバラバラ。6年くらいかける人もいれば、もっと時間をかける人もいる。

早川：9年までは博士課程（後期）に在籍できるので、休学をして時間をフルに使えるようにする人もいますしね。

藤野：社会人で働きながら研究している人もいれば、留学生のように研究だけに専念できる人もいる。いろんな人の様子を見ながら自分の研究ペースを作っていくのは大変です。休みを取るのもすごく難しくて、時間が空いても、つい「研究しなきゃ」と考えてしまう。

早川：そうそう。休みができても、つい「文献読んでおこうかな」と考えるから、常に何かに追われているような感じになる。こういう話をしていると院にマイナスのイメージを持たれそうですが（笑）、いいこともちろんあって、たとえば学会に出てトップの先生や実践者の方々と話ができるのは、院生ならではだと思います。社会人だと仕事が忙しくて、なかなか学会にも出席しにくいし。

藤野：それぞれの境遇が違いすぎて、比較ができないんですよね。院生の私と社会人を比べても意味がない。同期でも、日本人院生か留学生かでも全然違います。

木原：留学生の場合は休学ができませんからね。休学すると帰国しなきゃいけなくなるから、休学できる日本人院生とは事情が違う。

藤野：そうなんです。境遇が違うのに、比べてどうこう考えてもなあと……院で研究を進めていく上で「他人と比較しない」ことはとても大切なことだと思います。

木原：「我が道を行く」みたいな気持ちの強さ、自分の研究、実践、軸を大切にすることは、院で学ぶのに欠かせないでしょうね。髙坂さんは博士課程（前期）を出たあとは就職予定ですが、就職先もすごくこだわって探していますよね。いくつか打診はもらっているようですが……

髙坂：実は、まだ決まっていません。

木原：雇用条件ではなく、自分のしたいこと、やりたいことにつながるかを大切にされてますからね、髙坂さん。早川さん、藤野さんは、まずは博士論文ですね。

藤野：はい、まずは博士論文をちゃんと書き上げなきゃいけないな、と。もし書けたら、そのときは大学の教員・教職とか、研究員としてやっていければと思っています。

早川：私の場合は一旦仕事をしてから博士課程（後期）に戻ってきたので、もうあとは研究者の道になるしかないかなと思っています。博士号を取ると現場にはちょっと戻りにくくなってしまいますし。学生さんに伝えたいこともあるし、研究者として福祉業界を良くしていけたらなあ、という思いもあります。

木原：確かに、修士号取得までは専門職として就職の道がありますが、残念ながら欧米とは違い博士号を持った実践家は稀で、博士号を取得するとほぼ大学や研究所の道に進むのがオーソドックスな進路になりますね。ふたりとも、じっくりと自分のこだわりを言語化し論文としてまとめていってほしいと思います。

メディア学専攻
Media Studies

メディア学専攻では、「メディアとジャーナリズム」「情報と社会」「文化とコミュニケーション」の3つの視座から、現代の社会情報環境とメディア・コミュニケーションの影響・機能についての研究を行います。博士課程（前期）修了後はメディア関連機関・企業などで、博士課程（後期）修了後は官民の研究機関で活躍できる人材を目指します。

研究室

池田 謙一 教授 *Prof. Kenichi Ikeda*

研究テーマ　国際比較調査に基づく政治コミュニケーション・政治文化比較研究／ソーシャルネットワークとメディアの心理学

学生の主な論文テーマ　ソーシャルメディアや電子コミュニティの多様な社会的機能に関する比較分析／報道の内容分析：国際比較を中心に／人工エージェントと人間のコミュニケーションの基礎研究

河崎 吉紀 教授 *Prof. Yoshinori Kawasaki*

研究テーマ　新聞記者の歴史研究現代メディアの仕組みはいかにして成立したのか

学生の主な論文テーマ　五百木良三社長時代における雑誌『月刊・日本及日本人』天皇機関説排撃運動からの考察／日本における中国映画の受容：映画関係者へのインタビュー調査を通して

佐伯 順子 教授 *Prof. Junko Saeki*

研究テーマ　映像メディアにみるジェンダー表現とその歴史的、社会的背景

学生の主な論文テーマ　テレビ文化と女性ー初期のNHK朝の連続テレビ小説の形式転換と女性視聴者との関係／1970年代の「アイドル」文化装置としての雑誌『明星』／中国のSNSにおける男性同性愛者のコミュニケーション

伊藤 高史 教授 *Prof. Takashi Ito*

研究テーマ　社会理論に基づくジャーナリズム及びメディア文化研究／社会学的「表現の自由」研究

学生の主な論文テーマ　日本のドキュメンタリー番組における中国イメージ／差別的表現の自主規制にみるマスメディアの「表現の自由」に関する価値規範の検討

小黒 純 教授 *Prof. Jun Oguro*

研究テーマ　ジャーナリズム／テレビ・ドキュメンタリー／オーラル・ヒストリー

学生の主な論文テーマ　修士論文：中国メディアによる新たな日本・日本イメージの形成ームック誌『知日』を手がかりとしてー
博士論文：明治前期の京都における新聞発行史に関する研究：新聞紙の形態に着目して

竹内 幸絵 教授 *Prof. Yukie Takeuchi*

研究テーマ　広告史、メディア・デザイン表象と近代社会

学生の主な論文テーマ　70年代の広告におけるフェミニズムの伸長についての考察ー石岡瑛子のポスターを事例にー

主な就職先

日本テレビ／大阪中之島美術館／日本の民放テレビ局の中国支局／帝京大学／中国文化大学（台湾）

大学院で学べること

博士課程（前期）

メディアと社会の関係に対して理解を深め、実践的スキルを身につける

メディアと社会状況には密接な関係があります。博士課程（前期）では、各自の興味・関心を軸に、社会状況とメディアの機能・影響についての学術的・理論的な理解を深めます。また、現代の社会や情報と、メディアやコミュニケーションが互いに及ぼす影響やそれぞれの機能についての理解も、学術的・理論的により深めていきます。修了時には、メディアが抱える課題に応えられる高い識見を育成し、社会的・職業的にメディアを理解し実践できるスキルが身についていることが最終的な目標です。

専門家として求められる思考力・応用力を確立する

メディア学専攻のカリキュラムは、大きく講義科目と演習科目にわけられます。まずは講義科目の履修を通じ、「メディアとジャーナリズム」「情報と社会」「文化とコミュニケーション」の3つの視座から、社会とメディアに対する理解を深め自らの識見を育成します。さらに演習科目を通じ、指導教員のもと自分の興味・関心を深め、専門家としてメディアが抱える課題を解決に導けるような思考力・応用力を身につけます。このほか、学際的な基礎を確立できるよう、他専攻の科目等も含め学びを深めていきます。

博士課程（後期）

国際的・学際的な視点から知見と研究を深める

博士課程（後期）では、博士課程（前期）で行った研究をより深めます。理論的研究はさらに高度になり、スキルにもさらに磨きをかけていくことが目標です。研究において求められる視野はさらに広くなり、国際的・学際的な視野・知見は欠かせません。さらに、民主的で公正な社会の実現に向けたメディアの課題について自立的・専門的に探求していく姿勢も必要です。最終的には、官民の研究機関やメディア機関、メディアやコミュニケーション関連企業等で活躍できる、深い知見とスキルを持つ人材を目指します。

深めた知見とスキルをもとに、あらゆる分野に貢献できる人材へ

博士課程（後期）では、博士号取得を目指し、より高度な学術研究の研究方法やその実践的応用を身につけていきます。指導教員による指導のもと、学際的であることはもちろん国際的な視野を持ち、独創的な研究を行っていくことが目的です。全教員が参加する中間発表会はもちろん、学会発表や学術論文の作成などを通じ、専門家として求められる形式知・暗黙知を身につけます。博士課程（後期）を通じて得た知見・スキル、自ら深めた研究を通じ、学界・産業界・国際社会などに貢献できるレベルを目指します。

私の研究計画

女性の描かれ方は現実にどう影響したか

メディア学専攻
博士課程（前期）2年
黄 薇

日本のドラマにおける「キャリアウーマン」の描かれ方を研究しています。現在は2016年から2021年に作られた作品を対象に研究していますが、博士課程（後期）では調査対象の年代を1980年代から2020年代まで広げる予定です。さらにNetflixなどの動画配信サービスにも対象を広げ、対比したいと考えています。

「キャリアウーマン」という言葉は1970年代頃から使われるようになりました。1986年には男女雇用機会均等法が施行され、女性も働くのが当たり前になります。当初、キャリアウーマンに対するイメージはポジティブやニュートラルだったのに、徐々に「気が強い」「強引」などのネガティブなイメージも持たれるようになりました。自分で稼ぐ、成功している女性になぜこのような厳しいイメージがついたのか。博士課程（後期）では、まず、キャリアウーマンをヒロインにしたテレビドラマを、10年ごとに5本ずつ、視聴率が高い順に選びます。そして、作中でヒロインがどのような圧力や差別を受ける描写があるか、当時の現実の日本社会で女性を取り巻く環境はどうだったのかを調査して、分析する予定です。

近年は、Netflixなどでもオリジナルドラマが作られ、多くの人に観られるようになりました。動画配信サービスはテレビドラマよりも規制が少なく、作品の自由度も高いという特徴があります。アメリカ資本なので、アメリカのフェミニズムの影響を受けている可能性もあります。このようなオリジナルドラマも対比することで、日本だけでなく世界の女性像の変化も研究できるのではないかと楽しみです。

教員＋現役＋修了生座談会

メディア学専攻

互いに刺激し、助け合うゼミの温かさ

佐伯：今日は院生代表で、宮城さんと留学生の黄さんに来てもらいました。メディア学専攻では、最近10年くらいで留学生の女子が多い傾向がありますね。以前は日本人の学生も多かったのですが……

宮城：黄さんはじめいろんな留学生の方と一緒に学んでしゃべっていると、文化圏の違いを改めて感じて面白く感じることもよくありますね。

黄：研究の話もしますし、日本と中国の「中国料理」の違いとかも話しますよね。天津飯は中国にはないですよ、とか（笑）

宮城：天津飯の話は僕もびっくりしました（笑）こういうちょっとした話から、中国のエンタメ事情もよく話しますよね。作品の見方も違うから、刺激になります。

黄：私は、日本のTVドラマにおける「キャリアウーマン」のイメージの変化を研究しているのですが、昔のドラマだと背景がわからないこともあります。そういうときは宮城さんに教えてもらえて、とても助かっています。

佐伯：ここ2〜3年はなかなか懇親会などもできなくて、院生さんたちも雑談できる機会が減っていましたよね。だから、今二人のそんな話を聞いてちょっと安心しました。

宮城：佐伯先生のゼミは、エンタメ系の研究をしている人ばかりですよね。黄さんがドラマ、僕は宮崎駿監督作品、ほかにもドラマやゲームの研究をしている人がいて。何かと重なることが多く、助け合いの雰囲気はあると思います。

黄：皆さんからもらう意見は研究に役立つし、助けられることも多い。すごく感謝しています。私も、本を読んで「あ、これはあの人の研究に役立ちそう」と思ったら「多分役に立つよ」と紹介します。

宮城：「これ多分あなたの研究に使えると思いますよ」と言われて紹介された論文が、そのときはピンとこなくても、1年後に改めて読むと「これだ！」と思うこともある。きっと研究の仕方などが近いのでしょうね。だから、お互いに「これだ！」と思えるような文献を紹介できる。

佐伯：特にメディア研究は、年上の教員の意見よりは、世代が近い院生の意見のほうが参考になりやすいこともありますよね。同世代どうしで刺激し合うというのは、いいことだと思います。先輩から後輩に文献などを惜しみなく教えてくれる温かさは、同志社らしいですね。

宮城：そういうつながりは学部とは違いますね。学部だとゼミの人数も多いから、誰がどんなテーマで卒業論文を書いているかほとんど知りませんでした。自分の卒論で手一杯になっているところもあるから、ゼミ生同士でアドバイスし合うこともあまりありませんでしたし……

黄：学部と院のゼミって、そんなに雰囲気が違うんですね。

佐伯：黄さんは、大学は中国ですよね。

黄：はい。先生が教壇で話をして、学生はノートを取るという授業でした。ゼミ形式の授業は、日本で院に来て初めて知ったのですが、先生とコミュニケーションできて、自分でもちゃんと考えて話せる。こういう授業の方法はいいなと思っています。

佐伯：学部はどうしても人数が多いので、なかなかきめ細かなコミュニケーションが取りにくいときもありますよね。特に発表主体の授業だと、学部生は発表そのものに慣れていない場合もあり、とまどうこともあります。宮城さんと黄さんには今、ティーチングアシスタントに入って議論の活性化など先輩として学部生の授業をサポートしてもらっているので、助かっています。院だとみなさん自分の興味・関心を深めたいという気持ちが強いので、積極的に意見を言ったり質問したりしてくれます。コミュニケーションも双方向性が高くなるという違いはありますね。

博士課程（前期）在籍
宮城 智之

博士課程（前期）在籍
黄 薇

佐伯 順子
教授

研究の醍醐味は「わかった！」瞬間の爽快感

宮城：実は僕は、「メディア」というのはふわっとした概念だと、学部生のときからずっと感じていました。ドラマひとつとっても、制作される背景を考えるなら社会状況について、売り方を考えるなら経済やマーケティングについても知っておかないといけない。

佐伯：そうですね。「学際研究」と私もよく言いますが、特にメディア社会論、メディア文化史は幅広い範囲をカバーしている学問です。だから私も、みなさんの研究テーマを見るたびに「こういう研究もメディア学の研究としてありえるんだ、若い人たちはこういう関心を持っているんだ」とすごく刺激を受けています。

宮城：学部のときに佐伯先生の授業を受けたことがあります。ドラマや映画を見ながらの授業だったと思うのですが、当時はジャーナリズムや報道系の授業を多く取っていたので、ドラマなども学問としての研究対象になるのかと非常に面白く感じました。

佐伯：宮崎駿作品の場合は、児童文学のアニメ化、つまり活字メディアから映像メディアへの変更というメディア横断的要素があるので、社会科学と人文学の学際研究になりますね。黄さんの場合は、ジェンダー論の研究でもありますし。

黄：女性として、ジェンダーには関心があります。興味を持つようになったきっかけは、日本のアイドルグループなのですが（笑）メンバーが出演するドラマを見ているうちに、女性の描かれ方に興味を持ち始めたんです。日本に来て、語学学校で勉強しているときに佐伯先生の論文を読んで、この先生のもとで勉強したいと同志社を受験しました。合格したときはとてもうれしかったです。

佐伯：ありがとうございます。そう言ってもらえるとうれしいです（笑）

宮城：メディア学専攻の院生で、僕のように学部から上がってくる学生の比率が下がってきたという話を佐伯先生はされていましたよね。メディア学を志望する人は、理論を研究するよりは実地の経験を積みたがる印象があります。

佐伯：特に文系については、大学院に行ってしまったら一般企業に就職しにくいのではと考える人もいるようですね。メディア学専攻については、専門知識をいかしやすい業界があるので、そうとは限らないと思うのだけど……宮城さんは博士課程（前期）を修了したら就職するのですよね。

宮城：はい、地元のテレビ局に内定をいただいています。僕はもともと院に進んだきっかけが、学部生のときに就職活動をしていて自分の力不足を感じたことでした。まだまだ浅いところでしか理解できていないし、文献を読むのも足りていないな、と。院に入って、自分の関心ある授業を中心に取って、先生と一対一で論文を指導してもらって……関心を伸ばせるだけ伸ばせるのは、大学院のいいところだと思っています。

黄：理論を学ぶのは楽しいです。本を読んだり先生と話をしたりして「そうか、こういうことがあったからこういう現象が起きたのか」とつながる瞬間はとても気持ちいい。わかった！という爽快感。

宮城：「あ、これやん」となる瞬間は面白いですよね。昭和のCMのワンシーンにアニメが使われていて、それを研究してみたらイギリスの社会背景にたどり着き、さらに研究するとまた日本のアニメーションに、ひいては自分の修士論文のテーマにもつながったことがあって。この瞬間の「ハマった！」という感覚はすごく楽しいです。

黄：私は、その楽しさを追いかけて博士課程（後期）に進みます。試験も無事合格できました（笑）

佐伯：宮城さんは就職、黄さんは進学と進路も多様ですよね。研究内容も多彩で、留学生が多いからさまざまな文化や価値観に触れられる。多種多様な価値観や考え方に触れられ関心を伸ばせるのは、メディア学専攻の良さなのでしょうね。

教育文化学専攻

Education and Culture

教育文化学専攻では、多文化共生社会における教育文化による人間形成について学びます。多文化間においては多くの問題・課題が発生します。その解決には相互理解が欠かせません。問題・課題の解決に向け、相互理解を促進に向けた理論研究およびフィールドワークに取り組み、高度な知見と能力、広い視野を持つ職業人、研究者、教育者の育成を目指します。

研究室

兒島 明 教授 *Prof. Akira Kojima*

研究テーマ　人の移動と教育

学生の主な論文テーマ　日本社会における移民第二世代の教育・就労・家族形成

吉田 亮 教授 *Prof. Ryo Yoshida*

研究テーマ　日米間キリスト教交流史

学生の主な論文テーマ　修士論文：19世紀末における在日アメリカ宣教師による社会改良活動ーアメリカン・ボード宣教師イライザ・タルカット（Eliza Talcott, 1836-1911）を事例としてー

中川 吉晴 教授 *Prof. Yoshiharu Nakagawa*

研究テーマ　ホリスティック教育論の観点からみた人間形成

学生の主な論文テーマ　修士論文：異文化間対話の立体化―井筒俊彦の「東洋哲学」から／「出会い」としての教育―竹内敏晴の身体論から見た人間の主体性

越水 雄二 准教授 *Assoc. Prof. Yuji Koshimizu*

研究テーマ　フランス教育史（17～19世紀における近代教育システムの形成過程）

学生の主な論文テーマ　修士論文：E・デュルケムの道徳教育論―〈意志の自律性〉に注目して―

William Robert STEVENSON III 准教授

Assoc. Prof. William Robert STEVENSON III

研究テーマ　グローバリゼーションとエデュケーション

奥井 遼 准教授 *Assoc. Prof. Haruka Okui*

研究テーマ　「わざ」の伝承・創造、身体による学び、現象学的教育学

学生の主な論文テーマ　子どもと大人がぶつかる空間―フィールドワークからみる「子ども食堂」における文化的交じり合い

山田 礼子 教授 *Prof. Reiko Yamada*

研究テーマ　大学生のグローバル・コンピテンスの習得に関する国際比較研究／Withコロナ時代における頭脳循環モデルの開発研究／学修成果の測定研究

学生の主な論文テーマ　文理融合に関する実証研究／キャンパスの国際化に関する研究

主な就職先

〈研究職：名古屋大学／大分大学／京都橘大学〉〈職員：武庫川女子大学／摂南大学／椙山女子大学〉〈進学：京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程（後期）〉／小学校教諭

大学院で学べること

博士課程（前期）

教育文化学の基礎を固め、教育分野における高度職業人を目指す

博士課程（前期）で学ぶのは、多文化共生社会における教育文化による人間形成を研究するための基本となる知識や方法です。博士課程（前期）ではまず客観性と独創性がある研究テーマを自らの興味や経験に基づいて選び、その研究に必要な諸理論を学んだ上で、学際的方法に基づいて分析・解明し、体系的にまとめて修士論文を作成します。そして学んだ知識をもとに、学際的な視野を持ち主体的に活動できる高度職業人を育成し、学校等の教育機関や様々な組織で活躍できる人材形成を目指します。

自ら問題を発見し、体系的に分析して修士論文にまとめる

博士課程（前期）の授業は、必修科目と選択科目の2つに大きく分けられます。必修科目で学ぶのは、教育文化学専攻で研究するために必要な基礎的理論、研究方法などです。授業を通じ、自ら問題を発見し、分析・解決できる基本的な能力を身につけます。選択科目で学ぶのは学際的な知見をもとに多文化間の相互理解を推進できるような知識や能力です。最終的には修士論文作成を通じ、幅広い知識と手法の習得を目指します。

博士課程（後期）

より知見を高め、ハイレベルな研究職・教育者へ

博士課程（後期）の目的は、博士課程（前期）で得た理解・能力をさらに高めることです。多文化共生社会における人間形成・相互理解のためには、さまざまな文化への理解は必須です。教育文化の分野で新しい知見を提供できるようになるには、より専門的な研究と学際的な幅広い視野・知識は欠かせません。それぞれの専門テーマに対する理解や調査・研究能力をよりいっそう磨き、新しい知見を提供できる研究者や教育者の育成を目指します。

深い知識と理論を元に研究を進め、論文にまとめ公表する

博士課程（後期）での授業は、研究指導科目と授業科目に分かれます。研究指導科目の目的は、教育文化学特殊研究を通じ指導教員からより専門的な指導を受け、深い知識と理論を探求することです。授業科目ではさまざまな学際的な側面から知識と技能を習得し、多文化共生社会における教育文化による人間形成を理解し、多文化間の相互理解を推進していくレベルに到達することを目標としています。最終的には、博士論文を作成し自分の研究成果を公表することが目的です。

私の研究計画

オンライン国際共修授業の効果とカリキュラムにおける役割

教育文化学専攻〈留学中〉
博士課程（前期）
田中 源大

日本の高等教育におけるオンライン国際共修授業（Collaborative Online International Learning）の効果とカリキュラムにおける役割について研究しています。

当該教育手法を用いたプログラムは、従来の留学プログラムに比べ、より多くの学生を対象に実施できることから、日本では2018年ごろから新しい国際教育の手段として注目を集めるようになりました。とりわけ、2020年頃に始まった新型コロナウイルス感染症の流行により、海外渡航が制限されたことをうけ、留学に代わるオンラインを用いた国際教育プログラムが多くの大学で導入されるようになりました。

私の研究では、当該教育プログラムの受講者に対する質的調査の結果を手掛かりにその教育効果を検証し、海外渡航が正常に再開されるポストコロナ禍における当該教育プログラムの活用方法について検討します。

教員＋現役＋修了生座談会

教育文化学専攻

博士課程（前期）在籍
許 愛林

博士課程（前期）修了生
本山 恭仁子

中川 吉晴
教授

「教育文化学」は思われている以上に多様な研究ができる場所

中川：教育文化学専攻は、一度就職してからまた大学院に戻って来られる方や留学生の方も多く在籍していますね。

本山：私はまさに、一度就職してから戻ってきた人です（笑）

中川：学部を卒業して、それから一度教員になったんですよね。

本山：はい、中学の教員になったのですが、ちょっと思うところがあってすぐに辞めました。もう一度勉強し直したいと考えたのが院に戻ったきっかけです。学部生のときから中川先生にはずっとお世話になっていたので、「すみませんもう一度お願いします」みたいな感覚でした。

許：私は留学生です。母国で日本語を専攻して、身につけた日本語能力を活用しようと日本に来て、同志社の大学院に入りました。

中川：「大学院に入ったら研究者になるしかない」というイメージを持っているのか、学部から上がって来る人は相対的には少ないですね。決してそういうことはないと思うのですが……博士課程（前期）を修了したあとに就職する人もとても多い。本山さんも博士課程（前期）を修了したあと、また教員に戻っていますしね。

本山：はい。私は博士課程（前期）には結局3年いたのですが、その間に小学校の教員免許を取り、今は小学校の教員をしています。

中川：これが博士課程（後期）まで進むとなると、研究者の道に進む人がほとんどになってしまうのですが……許さんは進学予定でしたね。

許：はい。日本で進学するか、帰国して進学するかで迷っていますが、いずれにしても研究を続けるつもりです。

中川：許さんのように博士課程（後期）を目指す人というのは、少なくとも教育文化学専攻では実はあまり多くないように思います。修士号を取ったら教員になったり、いろいろな機関に就職したりして社会に出られるのではないでしょうか。

本山：教育文化学専攻の院生は、学部では教育以外の分野を専攻していたという人も多いですよね。さまざまな分野に詳しい人と話ができるので、視野が広がったり新しい気づきを得たりすることもよくあったように思います。

許：そうですね。教育というと学校をイメージする人が多いと思います。しかし、教育文化学は必ずしも学校の話だけではない。私は、外国にルーツを持つ子どもの教育支援について研究しているのですが、これは学校の外の話です。研究内容も、実際に支援している現場に行ってインタビューをするなどのフィールドワークが中心なので、学校という場所だけにはこだわっていません。

本山：逆に私は文献研究が中心でした。研究テーマは、学部生のときから竹内敏晴について取り上げていたのですが、簡単に言うと、子どもの主体性、「子どもが本当に主体的に活動するということはどういうことなのか」という話です。

中川：同じ教育文化学専攻でも、本山さんや許さんの研究は大きく違います。みなさん、本当に様々なテーマで研究していますね。過去には、映像授業という切り口から見たVtuberの研究をした人もいました。インドの思想家を、外国の文献を中心に論じた人もいる。教育文化学だからといって、直接教育に関わることしかできないとは限りません。おそらく学部生の方々が考えている以上に幅広い分野の研究ができる学問なのではないかと思います。

院の魅力は、指導教員や院生同士の討論を通じ学びを深めていけること

許：私は外国人なので、日本人とのコミュニケーションにズレを感じることもよくあります。知識や考え方の違いをどう伝えて討論するかは難しい問題で、これは私の研究テーマにも通じると思っています。だけど院は割と少人数で授業をするから、先生ともじっくり話せるのがいいですね。丁寧に、スムーズにコミュニケーションが取れるのかなと感じています。

本山：そうですよね。私は実は学部のときは照れくささがあって、発表などは割と消極的でした。院に入ると自分が思っていること、聞きたいことはどんどん口に出さないとやっていけなくなる。結果、学びがとても深められたのではないかと思います。

許：深いところまで討論でき、学べるというのは院の魅力の一つですね。

本山：しかも、中川先生のゼミは比較的穏やかで、あたたかく見守ってくださる感じがあって（笑）。さすがに修士論文の提出前は厳しかったように思いますが。

中川：演習の雰囲気は先生によりますからね（笑）。だけど、総合演習の時間は緊張したでしょう？全教員・全大学院生が参加する中で発表をするわけですから。先生ごとに専門が違うから、いろんな視点からの指摘が出てきますし。

本山：いつも胃が痛かったです（笑）

許：私は博士課程（前期）の1年目なので、総合演習ではまだあまり長い時間の発表はしていません。自己紹介や研究テーマを簡単に説明して終わったと思います。参加するたびに、発表に対し先生方からの鋭い指摘や丁寧な説明があるなと思います。来年の発表を考えると緊張しますが、ただ、そういう指摘があるからこそ、自分の研究に足りないところを見直せるのかな、と。

本山：それはその通りで、総合演習がなかったら私は修士論文を書けてなかったんじゃないかと思います。似たような分野の方のコメントはもちろん、まったく違う分野を専門にしている先生方のコメントも勉強になったり、励みになったりしました。

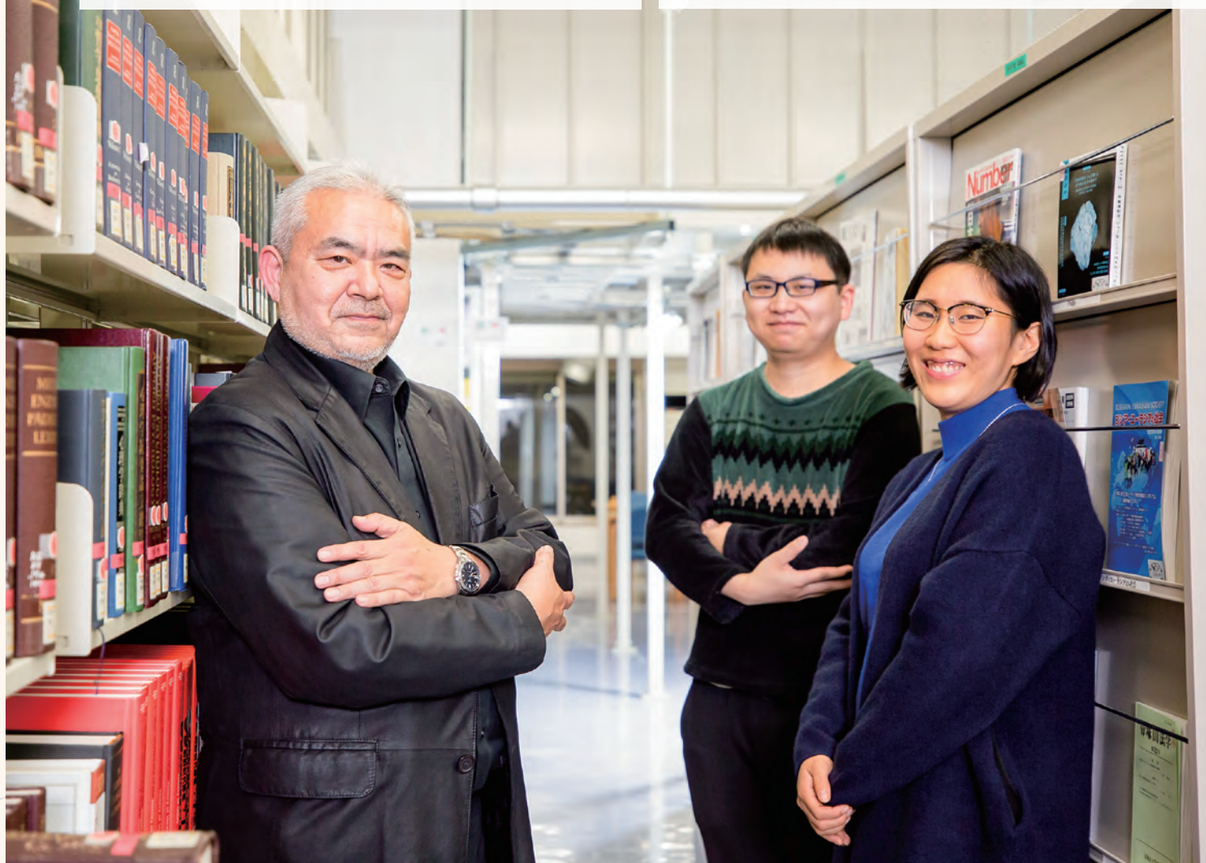
中川：本山さんは研究と並行して小学校の教員免許の取得も頑張っていましたよね。修士論文は大変だったろうと思います。

本山：かなりギリギリに完成させました。最後の2か月はもう本当に大変だったのですが、院の3年間を無駄にするわけにはいかない、と必死でした。今でも、4万字の修士論文を書き切ったことは大きな自信になっています。

許：私はこれから修士論文を書くのですが、院での研究は苦しいけど、面白くて楽しいと思っています。自分なりにどう研究を進めていくかも自分で調整していけるので、そこはすごくいいなと。

本山：院生もひとりの研究者として扱われるので、先生も割と院生の好きなようにさせてくれるように思います。研究テーマ、スケジュール、手法、自分で全部決めていくのは厳しいけれども、楽しくもある。自律心が必要な場所だと思います。さらに、院に来なければ会えなかったであろう研究者の方とお会いできる機会があるなど、院でしか楽しめないこともたくさんある。

中川：大学院で学んだことがきっかけで仕事やキャリアが変わった人は多くいます。院に進むことを特別なことだと思わず、「もうちょっと勉強してみたい」という気持ちで来てもらってもいいのではないかと思います。



社会学専攻
Sociology

社会学専攻では、社会学・人類学の分野における研究を理論・実証の両側面を重視して行います。博士課程（前期）修了後は、研究で得た知識等を生かし行政や民間の職員、教員として活躍する人材を、博士課程（後期）修了後は、民間や公的な研究機関等で教育者として活躍できる人材を目指します。

研究室

藤本 昌代 教授 *Prof. Masayo Fujimoto*

研究テーマ
就業者と働く場（集団・組織）と社会の関係を社会学の観点から研究しています。特に専門分化が進む中、専門職と組織の関係、技術の変化と職業への影響、働き方の変化やモビリティ、キャリアなどについて研究をしています。／AIが導入されている職場と働き方の変化、および職業への影響の国際比較／伝統産業の職人の技術継承と育成制度研究、産業集積地の職業関連の日仏比較

学生の主な論文テーマ
定年退職経験者の就労の規定要因について／看護系大学卒業者の資格取得後のキャリアパス―トップクラス看護系大学卒業者を事例として―／日本における外国人留学生の就職活動－中国人留学生を対象とする調査より－

小林 久高 教授 *Prof. Hisataka Kobayashi*

研究テーマ
現代人の社会意識についての理論的・実証的研究

学生の主な論文テーマ
現代日本の職業意識に関する社会学的研究―職業社会学的観点に基づく実証分析／厳罰志向に関する社会学的研究―デュルケム社会学的観点による理論的・歴史的・実証的検討／エミール・デュルケムの「道徳的個人主義」について

尾嶋 史章 教授 *Prof. Ojima Fumiaki*

研究テーマ
社会階層と教育・ジェンダーに関する計量社会学研究

学生の主な論文テーマ
学校教育と不平等の日本的特徴に関する実証研究―社会階層と学校トラックの関連を中心に―／中国における大学院進学希望に及ぼす階層と地域・戸籍の影響に関する実証的研究―北京の大学生を事例として―

板垣 竜太 教授 *Prof. Ryuta Itagaki*

研究テーマ
朝鮮半島および在日朝鮮人の近現代社会史、文化人類学

学生の主な論文テーマ
京都の民族教育と在日朝鮮人女性に関する社会学的研究／分断国家形成と軍隊忌避者たち／京都祇園祭山鉾行事の社会学的研究

森 千香子 教授 *Prof. Chikako Mori*

研究テーマ
ジェントリフィケーション、都市空間とレイシズム、差別の関係／排外主義、移民・マイノリティの差別と排除／フランス地域研究

学生の主な論文テーマ
中国人留学生差別と国家の役割／在日イラン人の国際社会学／地方の「村」と技能実習生／マイノリティの「語り」の可能性、映画作品におけるジェンダーと表象

立木 茂雄 教授 *Prof. Shigeo Tatsuki*

研究テーマ
福祉防災学（誰ひとり取り残さない防災）／家族社会学（家族システム円環モデルの研究）／市民社会論（ボランティア・NPO活動）

学生の主な論文テーマ
修士論文：中国大都市部在住の若年女性の家族モデルとライフコース選択の関係について
博士論文：被災前後の生活の連続性と被災者支援制度の非連続性／自治体職員に災害時に求められる「専門性」能力向上について

鵜飼 孝造 教授 *Prof. Kozo Ukai*

研究テーマ
社会ネットワークと関係主義／資本主義の社会学／ボランティアとNPO

学生の主な論文テーマ
修士論文：Identity Shift, Political Participation, and Social Movement: Malaysian Chinese after Bersih Participation
博士論文：中国人若年層の社会移動とネットワークの研究 ―趣味による紐帯の形成を中心に―／中国人留学生における親密圏の変容

主な就職先

同志社大学／法政大学／広島大学／静岡大学／摂南大学／大阪商業大学／島根大学／明治大学／吉備国際大学／マレーシア日本大使館／大連工科大学／University of Wisconsin-Parkside／株式会社MonotaRO／河合塾

大学院で学べること

博士課程（前期）

理論・実証の両方を重視した本格的な研究を主体的に行う

社会学の研究においては、理論研究と、理論にもとづくデータ分析が欠かせません。博士課程（前期）では、社会学・人類学の学問分野に貢献するオリジナルなテーマを大学院生が自ら選び、一線で活躍する教員の指導のもと、理論・実証の両側面から主体的に研究を行います。最終的には修士論文を作成し、民間や研究機関で活躍できる、もしくは博士課程（後期）に進みさらに深い研究をするために必要な基本的な力を養います。

社会学の知識や技能、さらには総合力を鍛え上げる

社会学を極めるためには、知識や技能に加え、自ら判断し、豊かに表現し、多様な人々と協働していく力の習得は欠かせません。そこで博士課程（前期）では、まず社会学理論の理解、社会統計学やフィールドワークなど社会調査法に関する知識と技能を身につけます。同時に調査の企画・実践力、学会や学術雑誌での発表に必要な能力の習得を目指します。所定の科目を履修し、調査にもとづく修士論文を完成させれば、専門社会調査士を取得することもできます。

博士課程（後期）

さらに深い研究を通じ、自立した専門的研究教育者へ

博士課程（後期）では、学界および社会の諸領域で活躍できる自立した専門的研究教育者となることを目指します。研究を通じて、人間社会に対する深い洞察力、オリジナルの研究を論理的かつ説得的に展開する能力、専門分野におけるコミュニケーションや組織化能力を養うことが、博士課程（後期）の目的です。最終的には博士学位請求論文を作成し、大学をはじめとする研究教育機関等において専門的研究教育職として貢献できるようになることを目指します。

教員の共同指導のもと、より広い視野を持つ研究者を目指す

博士課程（後期）の最終的な目標は、博士学位論文（博士論文）の完成です。博士論文の作成には、自ら研究を進め、国際学会や全国学会でその成果を発表し、学会専門誌に論文を発表することが求められます。そのため、所定のコースワークを履修し、指導教員の集中的な指導および他の教員による多角度からの指導を受けながら、各大学院生が自ら調査研究を進めることが博士課程（後期）の主な柱となります。

私の研究計画

新しい消費や消費意識とは何かを深く追求

社会学専攻 博士課程（前期）
神尾 駿佑

シェアリングエコノミーやサブスクリプション、エシカル消費やミニマリズムなどの新しい消費を中心とした消費社会論を、理論と実証の両面から研究しています。現在は、来年1月提出の修士論文の作成に取り組んでいるところです。

理論的な面からのアプローチとしては、消費とは何か、シェアリングエコノミーなどの新しい消費とは何かという概念的な整理を行っています。たとえばシェアリングエコノミーひとつとっても、近年は非常に身近な言葉になってはいますが、世界的なコンセンサスを得た定義は実はありません。そのため、まずは誰がどうシェアリングエコノミーを定義しているかという話を集めまとめて、その上で自分はどう定義するかという話からしていかなければいけません。実証的な面からは、消費に対する意識がどう社会活動に関連していくか、という視点からのアプローチをしていきます。社会活動との関連というのはつまり、たとえば新しい消費を志向する人は、どのような政治意識を持っているか、資本主義や社会主義に対してどのような印象を持っているか、などですね。こういった調査は、先生の協力を得て学部生にアンケートを採るなどして行っています。

研究をより深めるため、修士論文を提出した後は博士課程（後期）の入試を受ける予定です。博士課程（前期）に入るときは、どのような毎日が待っているのか今ひとつよくわかっていなかったような気がします。しかし博士課程（後期）については、野々村さんたちのような先輩がたを見ているとなんとなくイメージできるので不安はあまりありません。いい形で研究を進めていきたいと考えています。

教員＋現役＋修了生座談会

社会学専攻

講義の密度・レベルの高さは予想以上

神尾：僕が院に進んだきっかけは、卒業論文を書いているときに「もうちょっとこの勉強をやってみたいな」と思ったことでした。だいたい4年生の夏休みごろには院に進みたいと考えて、就職活動もまったくしていませんでした。

野々村：僕も卒業論文を書くのが楽しかったことが大きな動機です。思い返すと、卒業論文はまったく「研究」と呼べるようなレベルではなかったのですが、研究という世界も面白そうだ、と感じたことを覚えています。そしてこの世界から逃げられなくなってしまって、今に至ります（笑）

小林：院に入ると学部のような大きな講義はなくなり、ゼミ形式で、インテンシブに議論する授業ばかりになります。その変化はどう感じましたか。

神尾：一般的には、学部生がゼミ形式の授業に出るのは週に1回だと思います。僕も週に1回、小林先生のゼミだけがゼミ形式の授業でした。だけど大学院に入ると、毎日ゼミ。密度の高い授業がずっと続くので、最初は大変でした。

野々村：授業のレベルももちろん高くなりますし、より真剣に勉強、研究しなければいけなくなります。院に入ってからは学部で学んだ知識の重要性を改めて感じましたし、学部のときにもっとちゃんと授業を受けておけばよかったと思うこともありました。

神尾：たとえば資料ひとつ読むにしても、学部の頃は「読む」だけで十分だったのが、院に入ると「読み込む」ことを求められます。授業でコメントを求められることも多いので、読み込んで自分なりに考えておかないと、ちゃんとしたコメントができない。だから、修士1年の頃は緊張感がありましたし、すごく忙しかったです。

野々村：院は学部に比べると小規模な集団なので、他のゼミの方との交流の機会も自然と増えました。研究内容に関してもいろいろ話す機会が増えました。このような密な交流は、院ならではだと思います。

小林：マスターの1年目はそうでしょうね。自分が知りたいこと、研究したいことをまず学ばなければいけない。しかし同時に、自分が知りたいことだけやっていたら学問は広がらない。どうやってバランスを取るかが大切になってくる。それを乗り越えた今は、どうでしょう。

神尾：今は必要な授業をほとんど取り終わったので、修論に十分な時間を割けるようになりました。理論的な点に関してはなんとかなりそうかなと思っています。ちょっとだけ、終わりが見えてきたかな、みたいな……

小林：この前も相談に来てくれたけど、かなり形になってきていますね。修論がどこまで良くなるか、期待しています。

神尾：ありがとうございます。先生には、学部生に対する意識調査などでご協力いただいていて……大変ですがなんとかできているのではないかなと。

小林：野々村君はほかの大学で教えてもいて、ひとりだち一歩手前という感じですね。もうほとんど「若手研究者」と言っていいレベルで、今後どのような研究者になっていくか楽しみです。今書いている論文はどこまで進んでいますか？

野々村：いい感じになってきたかな、と自分では思っています。ただ、いくら自分で「いい感じだ」と思っていても、結局先生に読んでいただくといろいろ言われるので（笑）

小林：論文はそうやって少しずつ積み重ねていくものです（笑）またコメントしますので、見せてください。

博士課程（後期）在籍
野々村 元希

小林 久高
教授

博士課程（前期）在籍
神尾 駿佑

院は、教員と院生が互いに学び合える場

小林：大学院に入る人は、その人なりの「問い」を持っていることがほとんどです。そして院という場所は、ゼミごとに雰囲気が異なる。だから、自分の問いに答えを出したいなら、どのような教員がいて、どの教員のもとで学ぶなら自分のやりたいこととマッチするかを考えると良いのでしょうね。神尾君も野々村君も学部生の頃から僕のゼミに所属していましたが、その頃と研究テーマはほぼ変わっていませんね。

神尾：はい。僕は消費社会論を扱っているのですが、卒論の延長線上にあるテーマです。シェアリングエコノミーやサブスクリプションなどの新しい消費が今までとどう違うのか、そもそも消費とは何か、という研究を行っています。

野々村：僕はデュルケームを研究していますが、卒論からデュルケームは扱っていました。

小林：確か卒論では、夏目漱石とデュルケームについて書いていたっけ。

野々村：はい。ただ、卒論では理論中心で計量データを扱うことはまったく考えていませんでした。計量データの扱いについては院に入ってからたたき込まれたと思います。

小林：社会学の研究には理論とデータ分析の両方が欠かせません。神尾君のように「新しい消費」の研究をするにしても、マルクスの理論などを知っておく必要がある。野々村君が研究しているデュルケームの道徳的個人主義も、現代社会の問題などに対しどのような意味があるのかなどを、データを見て分析をしなければいけない。

野々村：理論と実証の両方やることで、研究にも厚みが出てきますね。

小林：そう、だから20勝できて3割打てるような人にならなきゃいけないんです（笑）よく言うよね、「大谷選手のようになれ」って。

神尾：そう言われると「なれません」と思ってしまうのですが（笑）

小林：だけど、わからないことがわかるようになるのは楽しいでしょう。ゼミにも、卒業して研究者になった先輩が遊びに来て、みんなでいろいろ議論したりしますよね。

神尾・野々村：はい、面白いです。

小林：研究や探究が好きな人にとっては、院で学ぶというのはとても良い環境があると思っています。ただ、学部で就職する人に比べると、やはり安定性というのは欠ける。研究を続けているうちに、迷いが出てくる人もいる。

野々村：かもしれませんね。ただ、僕は少なくとも院に進んで、博士課程（後期）まで研究を続けてきて、後悔はしていません。研究することの楽しさ、面白さはすごく感じます。

神尾：僕もそうです。文献をちゃんと読めた、書かれていることが理解できた瞬間はすごく達成感があってうれしいですよね。あと、論文に引用できそうな話を見つけたときも嬉しい。こういう瞬間が「面白さ」につながっているように思います。今は修士論文を書いている最中なのですが、論文を提出したあとも引き続き研究したいので、博士課程（後期）に進みたいと考えています。

小林：二人を指導していると思うのですが、ロジックの組み立てなどは、やはり教員に一日の長があるから、僕たちが「指導」しますよね。その一方で、野々村くんも神尾くんもそれぞれの専門分野を持っていて、その分野に関しては僕たち教員より知っていること、理解していることが多い。教えつつも、二人に教えられることも多いですよ。

野々村：そう言ってもらえると嬉しいです。僕は博士論文提出にはまだもう少し時間があるのですが、いいものが書けるようにがんばります。

小林：がんばってください。二人とも期待しています。

産業関係学専攻

Industrial Relations

産業関係学専攻で扱うのは、雇用・労働に関わる問題です。博士課程（前期）では、フィールドワークでの検証やリサーチセミナーでの議論を行い、事例の分析やデータの解析ができる力を獲得し、人事管理の専門家レベルの能力・スキルを身につけます。博士課程（後期）では、学会での研究発表や学術論文の執筆を通じ、より高度な研究や雇用ルール等の制度設計ができるレベルの人材マネジメントの専門家や研究職を目指します。

研究室

阿形 健司 教授 *Prof. Kenji Agata*

研究テーマ　労働市場における職業資格の役割についての実証的研究／生活者視点からみた働くことの意味の再検討

学生の主な論文テーマ　修士論文：事業変革期における企業の人材育成の変化と人材開発部門－製造業L社の人材開発部における仕事と役割に注目して－／未婚有業女性の自立した生き方がつむぐ新たな労働者像の萌芽－40代・50代ミドルシニア女性の就業継続と就業意識の変化を手がかりに－

三山 雅子 教授 *Prof. Masako Mitsuyama*

研究テーマ　日本の非正社員労働問題

学生の主な論文テーマ　日本との比較から見たベトナム労働者派遣の法規制と現状

冨田 安信 教授 *Prof. Yasunobu Tomita*

研究テーマ　多様な人材が活躍する職場

学生の主な論文テーマ　高齢社員が活躍する職場づくり－65歳定年の実現に向けて－

松山 一紀 教授 *Prof. Kazuki Matsuyama*

研究テーマ　組織行動論／フォロワーシップ論／戦略的人的資源管理論

学生の主な論文テーマ　企業における組織社会化に対する部活動経験の影響：大学体育会組織を対象として

寺井 基博 准教授 *Assoc. Prof. Motohiro Terai*

研究テーマ　長時間労働、非正規雇用D&Iの法と政策

上田 眞士 教授 *Prof. Masashi Ueda*

研究テーマ　仕事のガバナンス機構と雇用取引／日本企業における、雇用関係の構築様式／仕事論、賃金論からの示唆

学生の主な論文テーマ　修士論文：経済体制転換期における中国国有企業での人員整理の吟味
博士論文：HRM－Pリンクの理論的検討

浦坂 純子 教授 *Prof. Junko Urasaka*

研究テーマ　キャリアの選択肢としてのNPO・社会貢献活動
―就業の多様化を背景に―

学生の主な論文テーマ　キャリア構想・キャリア実現における格差は挽回できるか－大学生の視野を広げるもの－／若年労働者の学び経験とキャリア形成－「ゆとり教育」に注目して－／定年後のセカンドキャリア移行におけるアンラーニング

主な就職先

博報堂／労働政策研究・研修機構／同志社大学／金沢大学／立命館大学／大阪経済大学／三菱重工／日本電産／奈良県警／労働基準局／ニトリ／アクセンチュア

大学院で学べること

博士課程（前期）

雇用・労働をめぐる課題を見つけ分析する

少子高齢化や雇用の流動化など、雇用をめぐる状況は大きな変革期を迎えています。雇用・労働に関する問題もさらに多様になり、新しい課題も出てきました。博士課程（前期）では、自らの興味に基づき問題を見つけ、テキストと数値の両面からデータを実証・分析する能力を身につけます。そして雇用・労働に関する問題を体系的に認識し、理論的知見に基づいて新たな雇用ルールを提起できる人材を目指します。

産業関係学の基礎的理論とリサーチ方法を学ぶ

博士課程（前期）の授業は、「産業関係学研究」や「労働市場研究」などの必修科目と、フィールドワークなどを行う選択科目に分かれます。必修科目では、産業関係学の体系と方法ならびに市場メカニズムに関する理解を深め、雇用・労働に関する問題を実証分析に基づいて体系的に認識する方法を学びます。選択科目では、雇用・労働現象を理解するための理論を学び、独力でリサーチできる力を身につけます。

博士課程（後期）

新しい雇用制度やルールを作れるような人材を目指す

博士課程（後期）では、さらに発展的な研究を行います。そのためには、事実と理論の双方に基づいて課題を認識し、理解しなければいけません。博士論文等の学術論文の執筆や学会での研究発表を通じ、新たな雇用制度を提起できるよう、理論的知見をより深めていきます。そして、雇用・労働に関する社会的な課題を解決に導ける、新しい雇用ルールの制度設計ができるような能力を身につけます。

知見を高度に洗練させ、論文にまとめ公表していく

博士課程（後期）では、専門知識を深め探求します。最終的に目指すのは、博士論文の作成です。博士論文の作成にあたっては指導教員から専門的な指導を受けると同時に、合同演習形式である「アドバンスト・リサーチ・セミナー」などで様々な視点からの助言を受けます。研究の結果は学会発表や学術論文として公表し、教員や専門家の評価とフィードバックを受け、より深く、より洗練されたものへと高めていきます。

私の研究計画

バスの運転手が置かれた状況を人手不足の視点から明らかに

産業関係学専攻
博士課程（前期）
新谷 凌平

路線バスの運転手について研究をしています。このテーマについては学部のときから取り組んでいて、卒業論文から一貫して扱っています。

現在、少子化の影響を受けて多くの産業で人手不足が加速しています。学校の先生や保育士などの一部職業では人手不足が広く認識され、どう対応するかが社会問題にもなり、さまざまな人が研究するようになりました。しかし、乗り物の運転士、特に路線バスの運転手については、徐々に影響が出始めているにもかかわらず社会的にもあまり注目されていません。そこで、どのような人が路線バスの運転手になるか、どのようなきっかけで辞めていく傾向があるかを研究し、運転手をめぐる状況について明らかにしたいと考えています。

博士課程前期1年目は、産業関係学の基本を学ぶ授業が多く、また学部の頃よりも忙しくなったこともあり、なかなか自分の研究を行う時間が取れませんでした。しかし2年目からは余裕もできるので、路線バスの関係者などからのヒアリング含め、新たな情報・知見を得た上で研究に専念し、論文を作成する予定です。修士論文を作成して博士課程（前期）を修了できれば、一度社会に出たいと思います。研究科の特徴としても、一度社会に出て働き新たな視点を得ることは重要だと考えています。その上で、博士課程（後期）に戻ってまた研究ができれば、とても嬉しいですね。

教員 + 現役 + 修了生座談会

産業関係学専攻

博士課程（前期）在籍
達富 凌宇

博士課程（前期）在籍
山﨑 圭美

阿形 健司
教授

社会人経験がある人も多い、多様性ある議論の場

阿形：産業関係学専攻については、社会人経験のある方も多く入学されるという印象を持っています。達富さんと山﨑さんも、一度社会人になってから院に戻ってきましたよね。

達富：はい。学部を出て、社会人になって、今は1年休職して博士課程（前期）で学んでいます。

山﨑：私は社会人としてメーカーに勤めて、その後転職を経て学部に編入し院に上がりました。

阿形：産業関係学は雇用・労働の問題を扱います。社会人経験があれば雇用・労働の現場を具体的にイメージできるというメリットはあるでしょうね。発表のコメントを見てもそれは感じます。一方で、学部から直接院に上がってきた人は、社会人経験がないからこそ自由なコメントができて、それもやはり面白い。具体的なコメントと、自由な発想のコメントが混じり合って、刺激的なのではないかと思います。

山﨑：同じ社会人と言っても、出身の地域も違うし、勤めていた企業の規模・業種・仕事内容も違う。さらに、学年によっては留学生も混じるので、国籍・文化等の違いも出てきます。思ってもいなかった視点からのコメントもあるのは、確かにとても面白いですね。

達富：学部から直接上がってきた人は、就労経験がないからこそ見える、気づけることがあるんですよね。すごく新鮮なコメントをもらうことがあります。自分も昔そういうことを考えていたのかな、と思うこともあって、楽しいです。

山﨑：私の場合は、ミドルシニアのキャリアシフトの可能性についての研究をしているので、どちらかというと先生や就労経験がある人たちのコメントのほうが参考になることが多いかもしれません。とはいえ、これは研究テーマによりますね。

達富：そうですね。バックボーンも研究テーマも多様だからこそ、自分のコメントにも気をつけています。自分の就労経験はあくまで自分の経験でしかない。「自分のときはこうでした」「自分はこういうやり方をしました」くらいの話にするようにしています。

山﨑：細かなことを指摘するのではなく、相手の研究が発展していってほしい、という気持ちがコメントをするときには必要ですよね。

阿形：大学院は勉強したくて来られる方ばかりなので、発表やコメント、議論も活発になりやすい。時間とお金をかけて通っていて、中には達富さんのように休職している人もいるわけだから、頑張らないともったいないという意識があるのかもしれませんね。

達富：楽しいんですけど、発表や授業の予習は結構大変です（笑）

山﨑：学部から院に上がったとき、少し忙しさが収まるかなと思っていたら全然違って、びっくりしました（笑）。資料のレベルも高くなるし、ボリュームも増える。産業関係学専攻では、社会学や経済学、法学などさまざまな出身の先生から学ぶことにより学際的なアプローチもとれる。毎日、何かしらの文献を読んでいる気がします。

達富：そうしないと、議論に参加することもできませんからね。他の院生の方々も、みなさんしっかり準備して来るから。本当に休職してよかったです。働きながらこれだけの勉強をするのは、かなり難しいのではないかなと。

阿形：仕事をしながら博士課程（前期）を修了する人もいますが、そういう人は長期履修制度を使ってじっくり取り組む人が多いと思います。仕事と論文作成を同時進行させるのはなかなか難しいでしょうね。

自分で立てる問いこそが研究を進める原動力

阿形：達富さんも山﨑さんも博士課程（前期）1年目なので、修士論文の提出は来年になりますね。

山﨑：そうですね。まだこれからなので、細かな内容については今、先生や同じゼミの人とブレストしながら詰めている段階です。40代以上の人たちがキャリアシフトしながら、長く健康に働き続けるにはどうすればいいか、何が必要か。企業で働いていたときの経験から、従来の単線型のキャリアで働き続けることが厳しくなる40代以上の人って多いなと思うんです。キャリア変更に迫られたときに、それをポジティブに捉えて働いていける社会のあり方はどのようなものなのかとか、そういった大まかなテーマはあるのですが……

達富：私は福利厚生について考えているのですが、これはもう学部のときからずっと考えていることです。就職先は福利厚生関連企業を選びましたし、卒論もこのテーマでした。学生が就職活動時にどの程度、福利厚生を重要視するのかについて研究し、まとめる予定です。

阿形：修士論文や院での研究、あとは学部の卒業論文もそうですが、これらはすべて自分で問いを作り自分で答えを出す作業です。先生は問いも答えも教えてくれません。そこが難しいんですよね。そして本当に苦労するのは答えることではなく、問いを作ることなんですよね。山﨑さんは今ブレスト段階のようですが、問いさえできれば、論文はもう半分書けたようなものです。

達富：「これを解決したい」という気持ちがあると、院での学びは、はかどりやすいと思います。授業も自分の関心に基づいたものを取ればいいし、授業で扱っている文献も研究で役立ちそうなものがよくあるし。

山﨑：問いを立てる、問題意識を持つことは確かに重要だと思います。問題意識こそが研究を進める原動力なのかもしれません。院に入ると、質量ともに勉強量を増やさないとついていけない。どこまで理解しておけば十分なのかもわからない。もちろん、ある程度慣れることはできます。しかし、知識をインプットして議論としてアウトプットして、議論の中でまたインプットを得るという流れに乗って研究を進めるには「これを追求して明らかにしたい」という気持ちがないと難しいのではないかな、と。

阿形：院に入って研究を進めていけるのは学部の成績が良かった人だ、というイメージを持つ人もいるかもしれませんが、そうとは限りません。おそらく研究を進めていけるのは、ひとつでいいので「これを知りたい」というテーマを持ち、追求できる人でしょうね。

山﨑：卒業して、就職して、働いているうちに問いが出てきて院に入った私みたいなパターンもありますし、達富さんのように仕事を通じて問いがまた深くなる人もいますし。

達富：問いさえあれば、院での研究はきついですけどとても楽しいし、充実感もあります。博士課程（前期）を終えたあとは、将来的には博士課程（後期）に進みたいです。ただ、後期に進むタイミングはまだ決めていなくて……博士課程（前期）を終えてすぐか、数年程度時間を置くのか。仕事もありますし。

山﨑：私は、このまま博士課程（後期）に進むことを考えています。

阿形：雇用・労働の現場の経験と、大学院でのアカデミックな学び。この両方を経験することで、テーマも洗練され、論文にもリアリティが出てくると思います。山﨑さんの研究テーマにもつながりますが、キャリアシフトという点でも院での学びはさまざまな可能性があるのでしょうね。

各制度一覧

共同研究室

臨光館4階に、各専攻に所属する大学院生が使用可能な共同研究室があります。大学院の科目は、臨光館4階で行われることも多いので、快適な環境で、集中して研究をすることができます。

ライティングアドバイザー制度

社会学研究科の支援が必要な外国人留学生を対象に論文執筆等を大学院生により支援をおこなう制度です。支援対象は、博士課程（前期）もしくは博士課程（後期）に在籍する外国人留学生です。
支援対象となる期間は、博士課程（前期）：在学期間中（最大4年間）、博士課程（後期）：在学期間中（最大6年間）を対象としています。

TA制度

成績優秀な大学院学生に教育経験を積む機会を提供すること目的に設置された制度です。教員・研究者・専門職業人等としての自立を奨励し、学生であると同時に本学の教育に携わる一員として、所定の手当が支給されます。教員の指導のもと、正課授業において専門的知識を要する補助業務を担当していただきます。社会学研究科においては、在籍中にTAとして勤務された経験を活かし、大学教員の道を選ばれる方も少なくありません。

コピー補助

社会学研究科の大学院生全員にコピーカードをお渡しします。一人当たり、年間1000円分のコピーを補助しています。

幅広い学び

他研究科・他専攻の科目でも授業履修が可能です。四大学（関関同立）大学院単位互換制度を利用することができます。また、他大学と交流のある研究室も多く、情報交換も活発に行えます。

入試情報

社会学研究科では、全専攻において、博士課程（前期）の入学試験を、秋期（9月中旬～下旬頃）、春期（2月中旬～下旬頃）に実施します。
詳細は以下URL、またはQRコードからご確認ください。

https://ss.doshisha.ac.jp/g_overview/admission.html
※大学院外国人留学生入学試験要項は異なりますのでご注意ください。

特別入試制度

社会学研究科では大学院入学試験において、「特別入学制度」として、成績の優秀な者について、以下の条件をすべて満たす場合、筆記試験を免除し、研究計画についての口頭試問のみを行います。特別入学制度の対象となるための条件は、6月頃に公開予定の入学試験要項をご確認ください。

参考：2023年度大学院入学試験における特別入学制度の対象条件

社会福祉学専攻

本学社会福祉学科生の場合

（１）本学で第1年次より社会福祉学科で学び、本学を2023年3月卒業見込みの者。
（２）第3年次終了までに、「必修科目」24単位および「選択科目Ⅲ（外国語）」の必要単位12単位を含み、100単位以上を修得している者。
（３）全科目のGPAが上位20％以内の者
（４）次の❶、❷のうち、いずれかに該当する者
❶「英語」のGPAが上位20％以内であるか、TOEFL iBT®テストのスコア（2020年10月以降取得したもの）が79点以上またはTOEIC®LISTENING AND READINGテスト（2020年10月以降取得したもの）のスコアが750点以上の者。
※TOEFL ITP®テスト、TOEIC®LISTENING AND READINGテスト（IP）は対象になりません。TOEFL iBT®テストのスコアについては、Test Data スコアのみを出願スコアとして活用します。（MyBestTMスコアおよびHome Editionで取得したスコアは活用しません。）
❷ 社会福祉士もしくは、精神保健福祉士受験有資格者（3年次までに社会福祉実習Ⅴ、Ⅵを履修済みまたは履修中、もしくは、精神保健福祉援助実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを履修済みまたは履修中）。

本学社会福祉学科生以外の場合

（１）大学を2023年3月卒業見込みの者。
（２）出願時に全科目のGPAが3.2以上の者。
（３）指導教授の推薦状がある者。

メディア学専攻

（１）本学で第1年次よりメディア学科で学び、2023年3月卒業見込みの者。
（２）第3年次終了までに、「必修科目」12単位および「選択科目Ⅲ（外国語）」の必要単位20単位を含み、100単位以上を修得している者。
（３）「必修科目」および「選択科目Ⅰ」のGPA、ならびに「英語」のGPAがそれぞれ上位20％以内の者。

教育文化学専攻

（１）本学で第1年次より教育文化学科で学び、2023年3月卒業見込みの者。
（２）第3年次終了までに、「必修科目」12単位および「選択科目Ⅲ（外国語）」の必要単位20単位を含み、100単位以上を修得している者。
（３）「必修科目」および「選択科目Ⅰ」のGPA、ならびに「英語」のGPAがそれぞれ上位20％以内の者。

社会学専攻

（１）本学で第1年次より社会学科で学び、2023年3月卒業見込みの者。
（２）第3年次終了までに、「必修科目」18単位および「選択科目Ⅲ（外国語）」の必要単位16単位を含み、100単位以上を修得している者。
（３）「必修科目」および「選択科目Ⅰ」のGPA2.6以上、かつ「英語」のGPA2.6以上の者。

産業関係学専攻

（１）本学で第1年次より産業関係学科で学び、2023年3月卒業見込みの者。
（２）第3年次終了までに、「必修科目」24単位および「選択科目Ⅲ（外国語）」の必要単位20単位を含み、100単位以上を修得している者。
（３）「必修科目」および「選択科目Ⅰ」のGPA、ならびに「英語」のGPAがそれぞれ上位30％以内の者。

奨学金制度

同志社大学大学院では、充実した奨学金制度で研究科生の学修・生活をサポートしています。

主な奨学金制度

同志社大学大学院奨学金	授業料相当額の1/2を給付（年額）
同志社大学大学院特別奨学金	授業料相当額に120,000円を加えた額を給付（年額）
日本学生支援機構大学院奨学金	標準修業年限まで月額貸与
同志社大学大学院 博士後期課程 若手研究者育成奨学金	年間学費相当額（入学金を含む）を給付

選考基準・採用実績等の詳細は、ウェブサイトをご確認ください。 https://www.doshisha.ac.jp/scholarships/

長期履修制度

長期履修制度とは、職業を有している等の事情により、標準修業年限では大学院の教育課程の履修が困難な者に限り、最長6年間で計画的に教育課程を履修し、修了する制度です。また、本制度を利用する場合の学生納付金については以下の通りです。

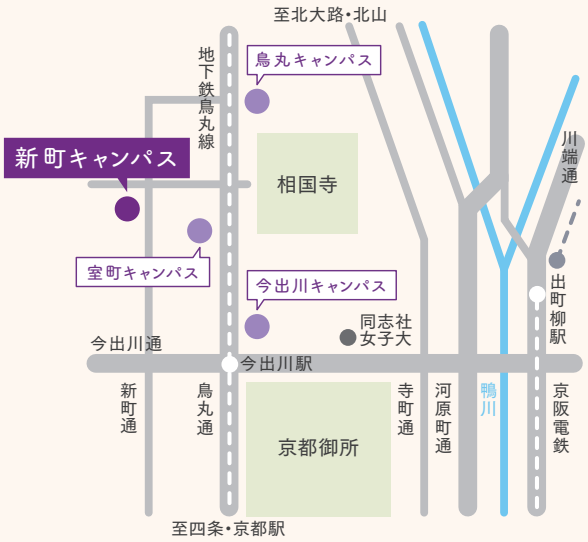
学生納付金

授業料	標準修業年限の総額を長期履修許可年限で除した額
教育充実費	標準修業年限の間は、所定の額。それ以降は、半額

https://www.doshisha.ac.jp/admissions_graduate/info/long_course.html

入試情報は変更になる場合がありますので、詳細はウェブサイトなどをご参照ください。

https://ss.doshisha.ac.jp/g_overview/admission.html



社会学研究科に関するお問い合わせ

社会学部・社会学研究科事務室

https://ss.doshisha.ac.jp/

〒602-0047 京都市上京区新町通今出川上ル 臨光館1F

075-251-3411

ji-shajm@mail.doshisha.ac.jp

Doshisha University

https://www.doshisha.ac.jp/